

令和5年度 小豆島オリーブ検定(’23ビギナー検定 東京会場) 正解表

設問	正解	テキスト 記載P	解 説
問1	3	p.68	オリーブ栽培の起源には諸説あるが、約6,000年前に小アジア地方で始まったというのが現在の定説である。
問2	4		
問3	1	p.8	日本に初めてオリーブオイルが持ち込まれたのは、約400年前の安土・桃山時代で、当時キリスト教伝道のため来日したフランシスコ派のポルトガル人神父が携えてきたと言われている。そのため、当時はオリーブオイルのことを「ポルトガルの油」、それがなまって「ホルトの油」と呼んでいた。
問4	2		
問5	1	p.9	日本へのオリーブの伝来は文久2年及び慶応3年に医師、林洞海が幕府医学所薬物園と横須賀に植えたのが最初とされている。
問6	2	p.11～p.12	明治37年から38年(1904年から1905年)の日露戦争により、北方海域に広大な漁場を獲得し、膨大な量の魚介類の水揚げが可能となった。その魚介類の保存、輸送の手段として油漬けの方法が採られ、これに使用するオリーブオイルの国内自給が求められた。
問7	4		
問8	3	p.11	神戸オリーブ園で、福羽逸人による管理が好成績を収め、明治15年(1882年)に果実が収穫され、日本で初めてオリーブオイルの採取及びテーブルオリーブの加工が行われた。
問9	2	p.10	佐野常民がイタリアからオリーブの苗木数十本を持ち帰り、東京と和歌山に植樹した。東京の苗木は枯れたものの、和歌山に植えられた苗木は順調に育ち、実を結び、これが日本で初めて実ったオリーブとなった。
問10	4	p.12	明治40年(1907年)に農商務省が、三重・香川・鹿児島県の3県を指定し、翌年それぞれ1.2haの規模で試験栽培を開始した。
問11	2	p.75～p.76	ネバディロ・ブランコは、明治40年(1907年)に、ミッシェンとともにアメリカのカリフォルニア州から導入された。
問12	2	p.12～p.13	明治32年(1899年)、香川県農事試験場の創設とともに福家梅太郎が場長に就任した。
問13	1	p.14	苛性ソーダによる脱渋技術を見出したことにより、日本における果実加工はようやく一歩を踏み出した。
問14	4	p.14～p.15	野呂癸巳次郎は、大正11年(1922年)から農事試験場に在籍し、グリーンオリーブの塩蔵の品質向上に努めた。
問15	3	p.38	平成17(2005)年に(株)ヤマヒサが国産オイルとして国内初入賞した。
問16	3	p.23	平成20年(2008年)、小豆島町では商工観光課内に設置していたオリーブ室を課に昇格させた。
問17	2	p.21	オリーブナビ小豆島を含む、オリーブ公園付近一帯は、オリーブゾーンとして整備された。
問18	4	p.17～p.18	昭和34年(1959年)に始まった、オリーブ製品の輸入自由化により、諸外国の安価なオリーブオイルやテーブルオリーブが大量に輸入されるようになり、国内のオリーブ価格は低迷した。
問19	1	p.19	昭和40年代以降小豆島で生産の主流となったオリーブの「新漬け」が未発酵タイプの漬物であり、海外からの輸入が困難であることから高値での販売を維持できたため、小豆島のオリーブ生産は生きのびることが出来た。

令和5年度 小豆島オリーブ検定(’23ビギナー検定 東京会場) 正解表

設問	正解	テキスト 記載P	解 説
問20	4	p.27・ p.33～p.34	小豆郡内のオリーブ果実収穫量は平成29年(2017年)に425tとなり、昭和39年(1964年)のそれまでの最高収穫量である405tを更新した。
問21	1	p.40	オリーブ樹は、モクセイ科、オリーブ属に属する常緑樹である。
問22	3	p.41	花芽は、3月下旬頃に形態的に分化、以後急速に花器を形成し、5月中旬には花器が完成し、5月下旬から6月上旬にかけて開花する。
問23	1		表面は厚い透明のクチクラに覆われて光沢のある濃緑色、裏面は密生した毛茸で銀白色になっている。
問24	4	p.42	自家不和合性とは、おしべ、めしべが健全でありながら、自家受粉では受精できず、結実しにくい性質のこと。
問25	4	p.75～p.76	ネバディロ・ブランコは、自家不和合性が強く、不完全花が多発するが、花粉が非常に多いため、受粉樹としての価値が高い。
問26	3	p.74～p.75	マンザニロは、果実が炭疽病に弱く、果皮や果肉が柔らかいため風害を受けやすい。テーブルオリーブ用に優れて収量も安定しており、さらに果実が大きく品質も良好である。
問27	1	p.73～p.74	ミッションは、アメリカから導入され、国内のオリーブ栽培のテーブルオリーブ用、オイル用兼用の最主要品種となっている。
問28	2	p.75	ルッカは、1本でも実をつけやすい品種であり、耐寒性・耐病性にも優れ、炭疽病への抵抗性も高い。
問29	2	p.52～p.53	香川県においてグリーンオリーブ(新漬け)用には黄緑色のオリーブ果実が使用される。
問30	4	p.44	日照量が多いほど生育がよく、年間2,000時間以上の日照時間が望ましい。
問31	3		オリーブは乾燥を好む植物とされているが、良好な生育、順調な果実の成長のためには、年間1,000mm程度の適度な降水量(灌水量)が必要となる。
問32	3		気温については、年平均気温14℃～16℃の温暖地が適当とされているが、比較的低温には強い。
問33	4	p.45～p.46	十分な保水力に富んだ排水しやすい肥沃地では収穫量、品質ともに良好で安定した生産を維持できる。
問34	3	p.45	花芽が付く条件には気温などの環境が大きく関係する。
問35	3	p.52～p.53	新漬けに用いられる果実の収穫は手摘みで行い、果実を手の中にやさしく包み込むようにし、親指と人差し指で果柄の上部をつかみ傷つけないように収穫する。
問36	4	p.40・p.45	オリーブ樹は根がもろく、風害を受けやすい。またオリーブ樹は常緑樹である。
問37	2	p.73	香川県農業試験場小豆オリーブ研究所で、平成30年(2018年)3月時点で53品種が保存されていた。
問38	3	p.80	ジャンボ・カラマタはオーストラリアから導入された。

令和5年度 小豆島オリーブ検定(’23ビギナー検定 東京会場) 正解表

設問	正解	テキスト 記載P	解 説
問39	1	p.48	オリーブアナアキゾウムシの防除に際しての薬剤散布の1例として、スミチオン乳剤の50倍液を使用する。
問40	1	p.51	マエカスカシノメイガはハマキムシとも呼ばれ、幼虫はハマキの名のとおり、葉の先を糸で巻き込むのが特徴である。
問41	4	p.49～p.50	幹に5～25mm程度のコブを形成する病気は、オリーブがんしゅ病である。細菌の一種が傷口から侵入することにより発生し、樹全体が枯死することはないが、落葉や枝枯れを起こす。
問42	1	p.54	圧搾法は、数千年来行われてきた伝統的な採油法で、1970年代中頃まで主な採油法であった。
問43	4	p.87	オリーブポマスオイルはオリーブポマス(採油粕)を溶媒や他の物理的処理することで得られるオイルのこと。
問44	1		エキストラ・バージン・オリーブオイルは遊離酸度がオレイン酸換算で100g中0.80g以下で、官能評価では欠陥の中央値が0.0でフルーティーの中央値が0.0を超えるものである。
問45	2	p.86・p.89	平成26年(2014年)にIOC基準に準じた県独自のオリーブオイルの品質評価基準を策定、「かがわオリーブオイル品質評価・適合表示制度」を創設し、品質の高さと香川県産(または小豆島産)であることの表示を行っている。
問46	3	p.90	オリーブオイルに含まれる脂肪酸のうち、約55～83%を占めるオレイン酸は、代表的な一価不飽和脂肪酸である。
問47	3	p.87・p.90～ p.91	精製オリーブオイルとバージン・オリーブオイルをブレンドしたオイルは、オリーブオイル(狭義)となる。
問48	3	p.20～p.21 ・p.26	県花は昭和29年(1954年)、県木は昭和41年(1966年)、島花・島木は昭和60年(1985年)に選定された。
問49	1	p.100	小豆島の美しい風景に魅せられ、小豆島のオリーブを日本に広く知れ渡らせることとなった画家は猪熊弦一郎である。
問50	2	p.26	昭和47年(1972年)「オリーブを守る会」が結成され、3月15日を「オリーブの日」と定めた。